

氏名	岩田 慎平
学位の専攻分野の名称	博士（歴史学）
学位記番号	甲文第134号（文部科学省への報告番号甲第465号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2013年3月2日
学位論文題目	鎌倉幕府と武士社会の研究
論文審査委員	（主査）教授 西山 克 （副査）教授 志村 洋 元木 泰雄（京都大学大学院教授）

論文内容の要旨

岩田慎平氏の学位請求論文である「鎌倉幕府と武士社会の研究」は、近年の武士論研究や鎌倉幕府研究の成果を踏まえながら、藤原頼経將軍期にいたる鎌倉幕府をめぐる諸問題について、意欲的に再検討を試みたものである。岩田氏によれば、近年の武士論研究は中世社会における武士の発生過程や存在形態を精力的に解明してきた。それにひきかえ鎌倉幕府研究は個々の論点が分散し、全体として統一感に欠けるといえる。本論文のなかで岩田氏は、武士社会の特徴と鎌倉幕府の構造を統一的に理解しようと努力している。本論文の全体は六章で構成され、その前後に序章と終章が置かれている。また、第二章と第六章の後ろには補論が取られている。以下、各章および補論の内容を要約する。

第一章「院宮王臣家・諸司・富豪層と武士」では、10世紀前半に起こった平将門の乱について再検討を行っている。特にこの乱の関係者である院宮王臣家・諸司使ならびに富豪層が、中央貴族などと政治的な提携関係を維持していること、一族内で在地活動と在京活動を分担していること、交通・流通の拠点を掌握していること、などの点で、後世の武士と多くの共通点を持っているとする。第二章「小鹿島氏の存在形態—鎌倉幕府成立史の一齣—」では、鎌倉幕府成立史における小鹿島氏の動向を検討している。小鹿島氏は出羽国小鹿島に所領を持ちながら、伊予国宇和郡ともつながりを持っていた。院政期において諸国の目代を勤め、鎌倉幕府の成立や運営に大きな役割を果たした小鹿島氏のような武士を、岩田氏は「吏僚的武士」という概念で理解しようとしている。補論一「舞女微妙とその周辺」では、『吾妻鏡』建仁二年三月八日条などにのみ現れる舞女微妙の人物像について考察している。従来は社会史の視座から研究が進められてきた遊女・白拍子・舞女のような女性芸能者を、武士論研究や幕府研究の成果を援用しながら考察しようとするもので、このような職人・芸能民にとって、鎌倉幕府の成立は、新たな奉仕先となる権門の成立を意味するものであったとする。第三章「頼家・実朝將軍期における鎌倉幕府の運営形態」では、鎌倉幕府を運営する実務面を担当する奉行人について検討を行っている。図表化した『吾妻鏡』の関係記事を分析材料として、幕府奉行人の業務分担を克明に検討したうえで、岩田氏は、幕府の運営が諸大夫身分に該当する京下りの吏僚らがおもに担当し、幕府の実質を支えていると思われた板東武士らの役割は、軍事・警察的なものに限定されることを明らかにしている。第四章「鎌倉幕府侍所覚書」では、建築史学の成果なども援用しながら、鎌倉幕府の家政機関である侍所について考察している。侍所は鎌倉幕府のような軍事権門だけではなく、貴族、特に摂関家の家政機関や邸宅にも設置された。そのことに着目して、まず貴族の家産機構や住宅の在り方と幕府侍所との共通性を繰り返し指摘し、そのうえで幕府侍所の特殊性を明らかにしようとしている。岩田氏による

と、それは侍所空間の規模と構造の差異にあるという。侍所で管理される侍、つまり御家人は、中世社会では群を抜く規模を持っていた。第五章「北条泰時執権期の鎌倉幕府に関する一試論—棟梁・評定衆・御成敗式目—」では、武家社会における棟梁の役割に注目している。北条泰時執権期の幕府には棟梁がいなかった。実質的に鎌倉殿・棟梁の地位にあった北条政子の死が特に重要な画期となる。棟梁不在の幕府運営は当然困難を強いられる。岩田氏によれば、最高意思決定機関である評定衆の設置と御成敗式目の制定は、その困難への対応策であったという。こうした法制度の整備によって幕府裁判の信頼性が担保されるようになると、幕府はむしろ棟梁を必要としなくなる。岩田氏は、「棟梁たるにふさわしい棟梁」を必要としない幕府への転回点をこの時点に見ている。第六章「九条頼経論」では、四代將軍の九条頼経およびその子息で五代將軍の頼嗣を対象に、武家社会における棟梁の役割に注意しながら、彼らの事跡を追っている。当該期の幕府の制度設計は、第五章で考察した棟梁たりえない將軍の推戴にあった。しかし將軍就任時に幼かった頼経が成人し、政治の実権を掌握することによってその制度と齟齬を来すようになる。さらに頼経を執権として支えた泰時の死が幕府を動揺させるが、やがて摂家將軍の終焉によって幕府はあらためて「棟梁たるにふさわしい棟梁」を必要としない方向に進むことになるという。補論二「九条頼経上洛を巡る政治構造」では、嘉禎四年の九条頼経の上洛を再検討している。当時の朝廷の政治実権を掌握していたのは、頼経の父道家であった。岩田氏は、従来、鎌倉幕府独自の政策と考えられていたこの頼経上洛を、父道家との緊密な提携のもとで行われたと指摘する。それは頼経の権威を高めるとともに、道家にとっても重要な意味をもった。道家は幼い四条天皇の外戚であった。四条天皇の王権を護持するために、道家は幕府の権威、武力を必要としたと岩田氏は主張している。

幕府の特色を安易に東国の地域性に帰結させることなく、院政期の公武関係史に、幕府をどのように適切に位置づけることができるか。岩田氏の関心は一貫してその点にあり、その幕府研究も、そうした関心に手がかりを得るためのものであった。

論文審査結果の要旨

武士論研究も鎌倉幕府研究も膨大な研究史の蓄積を持っている。岩田慎平氏はその膨大な研究史に分け入り、元木泰雄氏や高橋昌明氏、野口実氏などが新たに構築してきたグランドデザインに寄り添い、鎌倉幕府の組織や構成員について積極的な提言を試みている。その研究の最大の特徴は、各章で繰り返し述べられているように、武士を「一所懸命」だけの存在とは考えず、それを身分的にも空間的にも、列島規模の広がりの中で捉えようとしているところにあるだろう。特に、朝廷の官制秩序における公卿・諸大夫・侍のような階層性を、武士の存在形態に不可欠なものとする先学の研究を、具体的な事例に即してさらに推し進めようとしているのである。

岩田氏の研究手法は、鎌倉幕府の「正史」である『吾妻鏡』の条文を克明に読み込み、そこから具体的な事例を抽出しようとするものである。そのため岩田氏の研究は微細な領域にも及び、ときに見落とされていた課題をえぐり出すことにも成功している。鎌倉殿家政機関としての侍所や鎌倉幕府奉行人の業務に関する研究、また小鹿島氏のように研究の網の目から落ちていた御家人の存在形態に関する研究、薄幸の舞女の登場に権門都市の成立を想定した研究など、その解釈の当否はともかく、岩田氏が取り上げた諸問題は、これからは継続的に検討していかなければならない課題ばかりである。いわば新たなグランドデザインを、古記録の行文から抽出した事実の側から検証し、そのデザインの精度を高める仕事とも言えるだろう。九条頼経の上洛論なども（補論とはしているが）、まだまだ新たな展開の期待できる研究である。

もっとも本論文には多くの課題が残されている。まず序章の研究史の整理と課題の提示の仕方が未熟である。権門体制論と東国国家論の対立を権門体制論の側から無化しようとする文章であるが、鎌倉幕府と武士

社会というテーマに即応した緻密な議論が求められるだろう。

対象とする時代が後世に比較して史料が少ないという制約もあるが、本論文の主張は新しい事実の発見よりも、従来の研究史の読み替えが中心になっている。それは一面、中世武士論や幕府論が研究史上で新たな段階に達し、そうした読み直し、いわばパラダイムの変換が必要となっているためでもある。しかし逆にその読み直しが新しい座標軸の機械的な適用に堕してしまっているケースもある。鎌倉幕府と朝廷を異質で対立的なものとする古い学説に対して、岩田氏は鎌倉幕府を鎌倉殿の家政機関と位置づけ、新しい研究の潮流にあわせて、摂関家の家政機関と比較し、それらの同質性を浮かび上がらせる手法を繰り返している。上記のようにその比較によって見えてくる側面も多いが、そもそも軍事権門としての幕府を家政機関と位置づけるのは難しく、所司など構成員の規模も異なる。また院政を支えた院司との対比も行われていない。

また、「鎌倉幕府と武士社会」の研究と題しながら、武士社会成立の萌芽期を扱った第一章と、鎌倉幕府成立後を扱った第二章以降との間に250年のタイムラグがあり、連続性がない。在地／在京の移動や交通・流通の結節点に拠点をもつという存在形態だけで、富豪層・不善の輩と幕府御家人とのタイムラグを飛び超えるのは困難である。鎌倉殿と棟梁も単純に互換可能な存在ではない。幕府成立前後で棟梁の位相がどのように変質するのも検討しておく必要があるだろう。

以上のような問題点に関しては、2013年2月18日に実施された公開審査会でもいくつかの疑問が提出された。質疑は多岐にわたったが、多くは岩田氏の今後の研究課題として残されたと言える。しかし岩田氏の積極的な研究姿勢、特にその厳密な史料の読み込みからみて、それらの課題は早晩克服されるものであろう。本論文審査委員3名は、論文の審査ならびに公開審査会での口頭試問の結果により、岩田慎平氏が本論文によって博士（歴史学）の学位を受けるに値すると判断し、ここに報告する。